

東方

Eastern Book Review

458

2019 | 4 April

『内藤湖南未収録文集』発刊に寄せて

山田 伸吾

*

「中華経典古籍庫」利用体験記

山下 一夫

〈連載〉

❖ 中国古版画散策 瀧本 弘之

谷文晁が翻刻した「陳洪綬画」の『凌煙閣功臣図』
——「日本向け」……謎の書物の正体——

❖ 【続やっばり辞書が好き】

辞書の記述をめぐって 荒川 清秀
テレビドラマのことば (二)

❖ 中国の性愛文献 土屋 英明

『十大名伎』

❖ 書評

嘉戎語の絢爛たる接辞の構築を記述してその機能と意味を解析する

『嘉戎語文法研究』

池田 巧

*

知られざる北朝鮮と中国の映画交流

『北朝鮮と中国の映画交流史：1945—1955』

畑山 康幸

*

明治一五〇年を機に、漢詩から次の時代を開く

『知っておきたい日本の漢詩 偉人たちの詩と心』

ガイ ホップス



東方 458 号



CONTENTS

[表紙：成 東方書店刊『古陶文彙編』より]

- 『内藤湖南未収録文集』発刊に寄せて……………山田伸吾 2
- 「中華經典古籍庫」利用体験記……………山下一夫 6
- 中国古版画散策(51)……………瀧本弘之 12
 谷文晁が翻刻した「陳洪綬画」の『凌煙閣功臣図』
 —「日本向け」……謎の書物の正体—
- 辞書の記述をめぐって——続やっばり辞書が好き(143)……荒川清秀 16
 テレビドラマのことは(二)
- 中国の性愛文献(263)……………土屋英明 18
 『十大名伎』

連載

Book Review

- ^{ギャロン}嘉戎語の絢爛たる接辞の構築を記述して
 その機能と意味を解析する……………池田 巧 20
 長野泰彦著『嘉戎語文法研究』
- 知られざる北朝鮮と中国の映画交流……………畑山康幸 25
 劉宇著『北朝鮮と中国の映画交流史：1945－1955』
 (原題：유우지음 《북한과 중국의 영화교류사：1945-1955》)
- 明治一五〇年を機に、漢詩から次の時代を開く……ガイホップス 30
 宇野直人著『知っておきたい日本の漢詩 偉人たちの詩と心』

Book Information on China No.508…………… 64

*本誌記事・目録に掲載の書籍の価格は、特に表示のない場合、消費税別の価格です。*小社のホームページ(中国・本の情報館)では本誌の一部、また掲載外の情報をご覧いただけます。https://www.toho-shoten.co.jp

『内藤湖南未収録文集』 発刊に寄せて

山田 伸吾

この度、私たち「内藤湖南研究会」（河合文化教育研究所所属）は、『内藤湖南未収録文集』を刊行したが、この書の意義について若干の説明を加えたい。

内藤湖南の東洋史学に関する業績、主要著作、さらに操觚者時代の様々な時事評論は、『内藤湖南全集』（全一四巻、昭和四四年四月～昭和五一年七月、筑摩書房）にはほぼ収録されており、彼の思想、学説の全容は、この『全集』に依拠すれば十分把握できることは確かである。中国史に関する「唐宋変革論」（宋代以降を中国の近世・近代と見なす考え方）及び東洋世界における文化中心移動説（文化の波動説とも言えるもの）、日本史に関する応仁の乱以降を日本の「近世・近代」と見なす時代観など、湖南の主要な中国史、日本史に関わる考え方は総てこの『全集』に収録されているし、また、中国史に関する学

識を集大成した『支那史学史』・『支那上古史』、中国美術史を通観した『支那絵画史』、東洋文化の特徴についての見解を展開した『東洋文化史研究』などの主要著作も網羅されている。従ってこの『全集』に不備があったというわけではないのだが、「著作目録」に載せられてはいるものの収録されていない文章の存在は、私たちにと言わば「伏せ字」の如きもののような好奇心をそそるものであり続けたようである。ただ、収録されている文章の理解にさえ四苦八苦していた時にはその余裕がなかったのだが、私たち研究会会員による『内藤湖南の世界』（二〇〇一年三月、河合文化教育研究所）を出版した頃から、湖南の『全集』未収録文章を収集することで、新たな研究へのステップを踏み出せないかというような好奇心と意欲とが混じり合ったような気持ちも生まれてきた。

もちろん、未収録の文章を収集することと湖南研究をどう進めていくのかはまったく別の作業であり、たとえ新発見の湖南の文章が出て来たとしてもそれで研究に格段の進展が望めるわけではないことも十分承知した上で、それでも収集作業を兎も角も開始したのは、その当時やや研究会の活動がマンネリ化しており、停滞していたからであろう。未収録文章の収集作業自体が、研究会の持続を可能にしていたと言ってもよいのかも知れない。湖南の文章であれば、どんなにつまらないと思われる文章であったとしてもその思想の全体を構成しうる因子を持つているはずであるというような理屈を付しながら、「収集」作業を自己目的化することで研究における停滞に当面目をつぶったのである。しかし、文章のどのような細部であれ、その思想の全体につながりゆく因子を含むという、細胞のDNAと身体全体の関係を想定した比喩は、必ずしも誤りとは言えないことを後にはつきりと確認することになるのだが、それは後述することとして、未収録文章の収集という作業は、時間と労力を費やす力業であり、決して文章の読解や研究より楽な作業ではなかった。その内実については八箇亮仁氏の「はじめに」に詳しく述べられている。

こうした経緯から『内藤湖南未収録文集』が刊行されたわけだが、ここに収録された文章について若干の補足説明を加

えておきたい。

「第一部」の「文学上仏教の功績」（二篇）及び「日本文学と宗教と」（いずれも『大同新報』）は、日本文学についての簡略な歴史が述べられ、後の『近世文学史論』につながる内容となっている。同じく『大同新報』に掲載された「反動の大勢」（三編、「法律の変遷」（五編）は、明治期の「欧化」から「国粹」へという時代の思潮の流れが叙述され、やはり「史」的発想が確認できる。新聞記者としての湖南の同時代についての評論にも当初より「今」を歴史的大勢から読み取るという姿勢を確認することができるのである。

また、「弘道の一手段」（『日本弘道会叢記』）は、道徳を広めていくためには、実践的な行動が有効であろうが、口舌、筆舌も有用であり、害毒を流す悪文を駆逐するには、法律によるよりも高潔な文学の著作によるべきことが主張されているが、ここには湖南の思想の原質とも言えるものが孕まれているように思われる。ここでは言葉、文章の力が強調されているわけだが、歴史学における文献資料を重視する湖南の思考の原点が確認できる。湖南の歴史文献の蒐集に対する情熱は、淫すると言ってもよいようなもので、唐鈔本『説文』の九〇行に過ぎない一巻を三千数百円で中国から購入したことを自慢げに語っている（第三部、『サンデー毎日』「掘り出した二大珍

書〔談〕参照)。歴史の文献資料とは、もちろん言葉で記されたものであり、言葉の背後にはその時代の人間の精神世界が拡がっており、その精神世界をどう読み取るかによって歴史の変化を想定するというのが、湖南の歴史学、文化史学の在り方であったとすれば、「弘道の一手段」における言葉への信頼もそこに繋がりをゆくものであろう。その意味で、この短文にもまた湖南の歴史思想のDNAを見出しうる。道徳の言を発するよりも、言葉の力に言及しているところがいかにも湖南らしい。因みに「第三部」の「支那の古銭及金石に就て〔述〕」(貨幣)では、古銭蒐集家たちに実物(古銭自体)への興味とともに古銭に言及した歴史文献への関心をも持つべきことが提起されている。

「第二部」には、「朝鮮の経営」(二十六世紀)や「韓国に對する手段」(万朝報)、さらに『台湾日報』に掲載された記事などが収録されているが、注目すべきは『秋田魁新報』に掲載された「支那談、上中下」、「支那改革に就て、一六(講話)」であろう。これらは「清国改革難」(明治三四年九月、『大阪朝日新聞』、『全集』第三卷)の内容と重なり、言わばその「原型」に当たるものである。湖南の中国社会についての考え方は、「唐宋变革論」にせよ「文化中心移動説」にしろ、その大雑把な結論部分は了解できるとしても、そこに至る論理的な

筋道はそれ程解りやすいものではない。「郷党」社会についてもその特質について断言されてはいるものの、その証拠が示されているわけではない。何故そう考えるのかについては明確には語られてはいないのである。湖南にとって自明なことが今日の私たちにはまったく自明ではない、このことが湖南の文章の私たちにとっての難しさを形成する一因であるのかも知れないが、何れにしろ湖南の中国社会についての考え方は、現在の私たちからすれば湖南自身による詳細な「注付け」がなければわかり得ないような代物である。湖南自身による「注付け」は、もちろん不可能であり、「注付け」に代わるものを探し出さなければならぬ。その一つが同じ事象についての「談」や「講演記録」であり、「清国改革難」と『秋田魁新報』の記事との関係がまさしくこれに当たるだろう。「語り、談話、講演」は自身の文章とは異なり聞き手に対する配慮が加えられ、やや雑な点があるものの意図せざる逸脱も見受けられ、そこに文章では抑制されていた感情が垣間見えることもあり、湖南理解の一助になりうるように思われるのである。私たちにとって湖南の思考は解りやすいものではない。難解と言ってもよい。この難解さを解きほぐす鍵が、様々な「談」に隠されているかも知れない。その意味で『秋田魁新報』の「談」や「講話」も重視すべきだろう。

「第三部」は一九〇七年（明治四〇年）から晩年に至るまでの期間を扱っているが、中国では辛亥革命に始まる激動期に当たり、中国の「現況」についての分析が中心となっている。この間に湖南は『支那論』（一九一四年）と『新支那論』（一九二七年）を刊行しており、ここに収録されている中国社会への言及も、この二著と重ね合わせて理解されるべきものである。とりわけ「支那の社会組織（講演）」（一九二〇年、『井華』）は、この二著を繋ぐ内容として重要な位置にあるだろう。また、梁啓超及び林長民との論争はきわめて興味深い内容である。湖南は梁氏と会談したことがあるようだが、中国の国境に関する考え及び中国の国際管理に関する問題で二人には対立と言つてよい意見の相違があり、その論争内容から二人の思想的位置の違いがくつきりと浮かび上がっている。林長民は早稲田大学に留学し、段祺瑞内閣時の司法総長を務めた学者であり、政治家でもあり、湖南とも面識があつたようである。林氏は「敬告日本人」なる小冊子を湖南に送りつけ、湖南はそれへの反論を四つの論考で発表している。語り口はやや異なるものの内容的にはかなり重複する箇所もあるが、四篇すべてをこの「第三部」には収録してある。ここでも、湖南と梁氏との思想的位置の違いと同様のものが確認できるはずである。

朝鮮に関する論考としては、所謂「三一事件」以降の朝鮮総督府の官制改革に対する批判とも言える内容が展開されて

いる。「朝鮮統治の方針 上中下」（一九二〇年一月、『大阪朝日新聞』）が収録され、著作目録に挙げられてはいるものの『全集』には収録されなかった朝鮮に関する時事評論はすべて網羅されたことになる。また、この評論に先だつこと一年余りの一九一八年一〇月に満鉄の依頼で行われた「朝鮮の開国」の講演筆記録が関西大学の「内藤文庫」に保管されており、やや解説に手間取つたがこれも収録することができた。湖南にとつて数少ない朝鮮の歴史についての論及である。この場合の「開国」とは、もちろん古代における国の発生を意味し、中国の史書及び朝鮮の史書を利用しながら、神話から始まり事実的な国の成立、三国時代までがたどられている。「日韓古史研究（述）」（一九〇八年一〇月、『現代思潮 二十一 家講話』）とともに湖南の朝鮮史についての考え方を知る上できわめて興味深いものとなっている。

『内藤湖南未収録文集』は、当初の予定を超えてかなりの分量となつてしまつたが、それでもなおかなりの遺漏があることは確かであろう。しかし、当面の目的は達せられたと信じてたい。この刊行が内藤湖南研究をさらに発展させていくことを期待したい。

（やまだ・しんご 河合文化教育研究所研究員・

『内藤湖南未収録文集』編集委員）